府 縣
條但書ノ場合ニ於
庄之ヲ辨納セサル
達候事
大臣三條實美
院廳府縣
ハ金圓賜與手續別

大臣三條實美
又ハ金圓ヲ賜ヒ又
左ノ如シ
ニ分ツ）又ハ金十
等 木杯三組（品
ヲラス二圓五十錢
格ヲ三等ニ分ツ）
ヲラス 但賜杯賜
アルヘシ
金圓○第二等
附シタル者ニ金杯
キハ其等差左ノ
一個
ハ二十五圓毎ニ
三組
上ハ百圓毎ニ品
一個
上ハ五百圓毎ニ
三組
一個
二組
杯又ハ金圓ヲ
モノトス 褒狀
總監府知事縣令
位以上及ヒ勳六
ヤハ第四條ニ準
又ハ褒章ト金銀
ハ警視總監府知
内務卿又ハ農商
賞勳局總裁
シ
ハ勳六等以上ノ
者ハ内務卿又ハ
シテ之ヲ傳達セ
狀ヲ受クヘキ者
セラレタルトキ

府 縣
議リ收入ノ分ハ
第十七號及同二
江ニ準シ編入ス

ヘシ
十五年度ハ（酒造免許税麴營業税ハ十五年七月ヨリ十六年九月迄收入ノ分造石税ハ十四年第三期十五年第一第二第三期收入ノ分）
十六年度ハ（酒造免許税麴營業税ハ十六年十月ヨリ十七年九月迄收入ノ分造石税十六年第一第二第三期收入ノ分）
右相達候事

明治十六年三月廿六日　大藏卿松方正義

○陸軍省甲第十四號　府　縣

今般陸軍士官學校生徒召募候條同校條例第三章第二條及第三條掲示ノ通取計各府縣ニ入學願書取纏メ來ル五月十日迄ニ士官學校ヘ送付可致仍テ別冊士官生徒入學檢査格例竝ニ志願者心得相添此旨相達候事　（別紙略ス）

明治十六年三月廿六日　陸軍卿大山巖

○元老院　三月廿八日午前第九時三十分開議
勳章年金恩給停止等ノ儀布告案第一讀會

○本會ハ臨行又ハ行啓被爲在候節東館ハ當日午後一時迄衆庶ノ參觀ヲ許サス一時ヨリ平常ノ通リ西館ハ正午十二時迄衆庶參觀中日ノ通リ正午十二時限リ出場セシムル事

明治十六年三月廿五日　水產博覽會事務所

敍任賞勳

○二月廿八日分

陸軍砲兵少尉　正八位　山本綱賀
仝　仝　山本忠和
仝　仝　玉虫敬七
仝　仝　中村和義
仝　仝　平野好首
仝　仝　小野安堯
仝　仝　西山小二郎
仝　仝　高橋平治
仝　仝　加藤泰久
任陸軍砲兵中尉

陸軍工兵少尉　正八位　小川信
仝　仝　阿多實俊
仝　仝　大久保傳明
仝　仝　榊原貞造
任陸軍工兵中尉

陸軍會計軍吏副　從七位　外松孫太郎
任陸軍會計軍吏

時事新報

石油ノ試驗小事ニ非ズ（昨日ノ續）

今回第六號ノ布告ヲ以テ改定シタル眼目ノ點ハ舊規ノ見ル所ニテ最前ノ規則ニ燃燒試驗法ヲ用ヰテ其燃點攝氏ノ百十五度ナリシモノヲ改メテ閉塞發焰試驗法ヲ用ヰ攝氏ノ八十六度ニ定メタルニ在ルモノヽ如シ故ニ今コノ改定ニ由テ前後規則ノ實際ニ如何ナル差違ヲ生スルヤヲ知ルハ甚タ大切ナルコトナレハ試驗法ノ大概ヲ解スルニ非サレハ差違モ亦知ル可ラズ抑モ方今石油ヲ試驗スルニ三樣ノ法アリ曰ク燃燒試驗法曰ク開口發焰試驗法曰ク閉塞發焰試驗法是レナリ何レモ皆石油ノ温度何レノ點ニ昇テ火ヲ引クト引カザルトヲ撿シ以テ其危安ノ性質ヲ鑒定スルモノニシテ燃燒試驗法ハ石油ヲ金屬ノ器ニ盛リテ之ヲ水槽ニ入レ槽ノ下ヨリ火ヲ與ヘテ次第ニ其温度ヲ昇ラシムルコト日常酒ヲ徳利ニ滿タシテ湯煎ニスルト同樣ノ仕掛ニシテ器中ノ石油ニハ初ヨリ驗温器ヲ挿入レ其温度ノ次第ニ昇ルヲ窺フテ幾回モ之ニ火ヲ點シ例ヘハ攝氏ノ驗温器百十五度ニ達シテ始メテ火ヲ引キ燃續スルモノハ之ヲ百十五度ノ石油ト名ク或ハ百十五度ニテモ尚無事ニシテ漸ク百二十度ニ至テ燃ルモノハ之ヲ百二十度ノ石油ト云フ故ニ百二十度ノモノハ百十五度ノモノヨリモ危險少ナキコト五度ナリト知ル可シ

右ノ如ク燃燒試驗法ハ直ニ火ヲ以テ油ニ接スルノ法ナレハ石油ノ危險ナル由緣ハ獨リ其油ノ燃ルニ在ラズ、恐ル可キハ油中ニ含有スル可燃瓦斯ノ引火力ニシテ此瓦斯ハ油ノ温度未タ燃燒ノ點ニ達セザルノ前早ク既ニ揮發スルガ故ニ油ニ拘ハラズ唯瓦斯ノミニ火ヲ點シテ之ヲ試ルノ法勿ル可ラズ且燃燒法ハ隨時些少ノ事情ニ從テ試驗ノ結果ヲ異ニスルコト一樣ナラズ西洋諸國ニテモ近日ハ政府ニ此法ヲ採用スルモノ少ナシト云フ故ニ爰ニ揮發瓦斯ニ火ヲ點スルノ法アリ即チ開口發焰試驗法是レナリ此法ノ仕掛モ大抵燃燒法ニ異ナラズ石油ヲ湯煎ニシテ瓦斯ヲ揮發セシメ屛風ナド引廻ハシテ空氣ノ動搖ヲ防キ火ヲ直ニ油ニ接スルコトナクシテ少シク其上邊ニ點火シ瓦斯ノ力ヨリ此火ヲ引クトキハ些少ノ焔ヲ發シテ瞬間ニ斷絕ス其狀恰モ細電光ノ閃クガ如シ故ニ之ヲ「フラッシング」ト云フ蓋シ閃ノ義ナリ此法ハ燃燒法ニ比スレハ稍ヤ巧ニシテ瓦斯ノ引火力ヲハ驗ス可キニ似タレトモ尚未タ完全ナラズ如何トナレハ緻密ノ試驗中僅ニ試驗者ノ呼吸鼻息ヲ以テ空氣ノ動搖ヲ起ストキハ以テ其結果ヲ誤ル等ノ憂アレハナリ

人事ニ要スル所アレハ學術ノ工風以テ其欠典ヲ補フ可ラザルモノナシ一千八百七十五年英國ノ學士「エーベル」氏同國内務卿ノ囑託ヲ受ケ樣々工夫ヲ運ラシテ遂ニ一種ノ器械ヲ製作シタリ即チ閉塞試驗法ノ權輿ニシテ千八百七十九年同政府ニ採用シタルモノナリ其大体ノ主義ハ開口試驗器ニ似タレトモ石油ヲ盛リタル器ヲ直ニ湯ニ入レズシテ空槽即チ空氣槽中ニ懸ケ其氣槽ヲ水槽ニ入レテ水槽ノ外ニ又氣槽アリ水ト空氣ト三重ノ槽ニシテ其下ヨリ極メテ徐々ニ火ヲ與ヘ中心ニ懸リタル石油ノ器ハ蓋ヲ以テ之ヲ閉塞シ其蓋ノ中程ニ方孔ヲ穿テ恰モ無双窓ノ仕掛ヲ以テ開閉ヲ自在ナラシメ器中漸ク可燃瓦斯ノ發生スルヲ窺ヒ無双窓ヲ引テ方孔ヲ開ケハ瓦斯ハ此孔ヨリ遁レントスル其同時ニ兼テ蓋ノ上ニ點シタル燈火ハ其首ヲ垂レテ孔ノ邊ニ傾キ瓦斯ニ逢フテ火ヲ移スノ仕掛ヲ以テ其燃不燃ヲ試ム可シ其燃ルモノハ瞬間ノ閃光ニシテ開口試驗ニ於ケルモノニ異ナラズ以上所記ノ如ク閉塞法ハ一切器械ノ裝置ニシテ直ニ人ノ手ヲ用ヰザルガ故ニ空氣ノ動搖モ憂ルニ足ラス點火ノ程度モ誤ルコトナクシテ其試驗ノ精密ナルコト他ノ二法ニ比シテ同日ノ論ニ非ス蓋シ今日ニ於テハ之ヲ稱シテ世界最上ノ良法ナリト認メサルヲ得ズ千八百七十九年英國政府ニ於テモ從前ノ開口法ヲ廢シテ「エーベル」氏ノ新器械ヲ採用シ爾後獨逸政府ニ於テモ之ニ倣ヒ其他各國學士ノ評論又其政府ノ議ニ於テモ此閉塞器械ヲ稱賛セサル者ナシト云フ

以上三樣ノ法ヲ以テ試驗シタルモノハ内國外國共ニ幾多ノ實例アリ其結果ヲ見ルニ燃燒點ト開口發焰點トノ差異ハ凡ソ華氏ノ二十度ニシテ開口發焰点ト閉塞發焰點トノ差異ハ同二十七度ナリ即同性質ノ石油ヲ取テ之ヲ試ルニ例ヘハ燃燒法ニテ華氏ノ百十五度ニ引火スルモノハ開口法ニテハ九十五度ニ發焰シ閉塞法ニテハ六十八度ニ發焰スルノ平均數ヲ得ルヲ常トス左レハ明治十四年第四十號石油取締規則第一條ニ華氏驗温器百二十度トアルモノヲ同年第五十號ノ改定規則ニ「ボウエン、テスト」百十五度ト爲シタル其百十五度ハ正ニ閉塞發焰點ノ六十八度ニ相當スルモノナレハ之ヲ實際ニ施シテ石油點燈ノ危險ヲ豫防スルニ足ラザルヤ明カナリ然ルニ今幸ニシテ日新學術ノ功德ニ由リ未タ其規則ヲ實施セサルニ當テ早ク既ニ危險ヲ前知シ本年更ニ規則ヲ改メタルハ人民ノ慶福ニシテ我輩ハ只管我學問ノ進歩ニ向テ禮謝スルモノナリ

（以下次號）

正誤

昨日ノ社說第二段第二十二行百度ノ下ニ（俗ニ攝氏ト誤譯スルモノ）ト記シタルハ全ク筆記者ノ竄入ニ係ル依テ爰ニ正誤

雜報

○行啓　皇太后宮には本日午前八時三十分青山御所御出門にて芝公園地内の能樂堂へ行啓遊ばさるゝ旨昨日仰出されたり

○有栖川宮　有栖川左府宮には義に歐米各國航海中所々に於て厚く待遇を受け給ひし貴顯の人々へ宛最と鄭重なる謝狀を此程贈り賜ひしといふ

○河村海軍卿　此程豆州熱海へ入浴の爲め赴むかれし河村海軍卿及び末川海軍大佐には一昨日歸京せられたり

○税所篤君　先頃京坂地方へ赴むかれし税所元老院議官には最早御用濟にて明廿八日歸京の旨其筋へ通報ありたるよし

○谷陸軍中將　同中將には先般意見書を内閣へ差出されし趣に依りて非職とならるゝが其後或る両名の者論じて頻りと再勤の義を勸められしも更に肯れるゝ色なく猶又目を經て右両參議へ一封の意見書を呈せられしやに聞く

○後藤板垣二君　去る九日英國發の同國飛脚船が持ち來りし倫敦支那エキスプレスによれば後藤板垣の両君は當時目耳曼に滯留中なりといふ

○金内議見　此程朝鮮國より歸朝せし日進艦乘組の海軍